

聖書:士師記3章1～11節

説教:イスラエルの子らのために

## 1 イスラエルが直面した二つの問題

### 1) カナン人との紛争

ヨシュアがイスラエルの民を率いて神の約束の地であるカナンに入ろうとしたとき、そこにはすでにカナン人たちが住んでいたことから、イスラエルは二つの大きな問題に直面します。

一つ目。カナン人は、イスラエルの民が入って来れば、自分たちの土地を奪われ、仕事も奪われると警戒して、みな町の門を閉ざしてイスラエルを入れようとしません。今の時代も移民しようとする人たちを受け入れるかいないか大きな問題となっていますが、まさにそれと同じです。今なら、政府組織が動いて問題の解決のために動くのですが、聖書の時代にはそのようなものがあるはずもない。当然そこに紛争が起きることが予想される。目に見える現実世界の戦いという言い方もできます。これが一つ目の問題でした。

### 2) バアルの誘惑

いっぽう二つ目の問題は、それとは反対で目に見えない世界の戦いという言い方ができます。何かと言えば、カナン人たちは神々を拝んでいて、これがイスラエルの若い世代の人たちには非常に魅力的に見えて、誘惑してくる。これとどう戦っていくのか。

この二つの問題を前にして神はどのように導いて行かれたか、そしてイスラエルはどのような選択をしていったのか。そして、私たちにとってこのことはどのようなことなのか。ともに見てまいります。

## 2 試みる

### 1) なぜ異邦の民を残すのか

アブラハムがカナンの地に初めて足を踏み入れたとき、神が「わたしは、あなたの子孫にこの地を与える」と約束されたその約束にこだわり続け、いまヨシュアをリーダーに立てカナンの地に入って来ました。それなのになぜ神はカナン人をそこに置いたままにして、イスラエルが苦しい目に遭うようにされるのか。そのような疑問が持ち上がります。

このことはイスラエルだけではない。私たちの信仰にも関わってきます。信じている私たちにもこれと同じように神はされる可能性があるということになる。世の人たちは平安無事を願って神社に

お参りし、お札を買って守り神にもします。ところが教会に来たら、もしかして神はあなたを苦しめることがあるかもしれないと聞かされる。いったいどちらの神が魅力的でしょうか。どうしても神が私たちに苦しみに合わせることを避けられないのならば、その理由を教えてもらわなければ神を信じることは難しくなるでしょう。いったいなぜ神はイスラエルをこのように取り扱うのでしょうか。

### 2) 目的1:戦いを教え、知らせるため

聖書には二つの理由がきちんと書かれていて、その一つ目は1、2節にあります。「次が、主が残しておかれた異邦の民である。主がそうされたのは、カナンでの戦いを全く知らないすべてのイスラエルを試みるためであり、ただ、イスラエルの次世代の者、特にまだ戦いを知らない者たちに、戦いを教え、知らせるためであった。」

神があえて異邦の民を残した一つ目の目的は、戦いを教え、知らせるためであった。いったい何の戦いでしょう。「決まっているではないか。カナン人との戦いだ。」そのようにも見えますが、ただそそれだけでしょうか。そのことはまた後で見ることにしましょう。

### 3) 目的2:命令に聞き従うのかを知るため

神がなぜ異邦の民を残したのか。その二つ目の目的は4節にあります。「これは、彼らによってイスラエルを試み、主がモーセを通して先祖たちに命じた命令に、イスラエルが聞き従うかどうかを知るためであった。」

主がモーセを通して先祖たちに命じた命令とは、出エジプト記23章32、33節を指すと考えられます。「あなたは、彼らや、彼らの神々と契約を結んではならない。彼らはあなたの国に住んではならない。彼らがあなたを、わたしの前に罪ある者としないようにするためである。あなたが彼らの神々に仕え、あなたにとって畏となるからである。」

ヨシュアはカナンの地に入るときに、もう一度この命令をイスラエルに語って聞かせ、これを守るかどうか問いかけたところ民たちは、「私たちが主を捨てて、ほかの神々に仕えるなど、絶対にあり得ないことです。」「私たちが主に仕えます」と応えました。彼らは四十年間荒野を旅していたと

き、大変な苦勞をしながら神の恵みを身体で体験していましたのでヨシュアの間いかけに素直に応えることができました。しかし彼らの息子娘の世代になるとまったく違う。彼らは神の恵みを経験していません。バアルの誘惑がどれほど危険であるかもピンときません。神はこの若い世代に改めて信仰とは何かを教えるために、あえて異邦の民を残したのだと語ります。

### 3 イスラエルの次世代

#### 1) 主の目に悪であることを行った

その若い世代は結局どうなったのでしょうか。5、6節。「イスラエル人は、カナン人、ヒッタイト人、アモリ人、ペリジ人、ヒビ人、エブス人のただ中に住み、彼らの娘を自分たちの妻とし、また自分たちの娘を彼らの息子に与えて、彼らの神々に仕えた。こうしてイスラエルの子らは、主の目に悪であることを行い、彼らの神、主を忘れて、もろもろのバアルやアシェラに仕えた。」

彼らが、こんなにも簡単に主の命令を破ってしまったことに驚くかもしれません。でも皆さんは主の命令を守れるという自信があるのでしょうか。自信があるという方がいるなら、残念ながら人の罪がどれほどに恐ろしいものかまだわかっていないのかもしれませんが。ここに書かれていることは、まさに私たちの姿です。

#### 2) さばきつかさ：オテニエル

イスラエルの若い次の世代は、バアルやアシェラの像を拝み、その結果幸せになりましたというのならばめでたしめでたしですが、ところが主の怒りが燃え上がり、クシャン・リシュアタイムを使ってイスラエルが苦しむようにさせます。

「主の怒りが燃え上がり」というようなことばを読むと、神は嫉妬深くて怒りやすい方で近づきたい、そんな印象を持つでしょう。でも何度も言いますが、神は理由もなく感情にまかせて怒る方ではありません。こうするにはちゃんとした理由がある。バアルという偽物の神を拝んでもあなたがたは本当の幸せを手にはできない、本物の幸せがどこにあるかを知って自分でつかみ取って欲しい、そのためにあえて私たちを苦しむようにさせることがあります。この場合、民たちが自ら進んでバアルを拝み、その結果自分たちが苦しむことになったわけですので、結果だけを見て神は意地悪だとか、愛がないと言うのは的が外れています。

### 4 主が教えようとしたこと

#### 1) 戦いとは

それでもなぜという疑問は残ります。どうして神はもっと穏やかな別の方法をとらなかったのか。どうして民が苦しむような方向に仕向けるのか。そういう疑問がくすぶります。

でも先ほど見ましたように、神は何度も警告していたことを忘れてはなりません。民たちは、「私たちは主にだけ仕えます」とはっきりと約束もしていた。それなのにこうも簡単に約束を破ってしまうわけです。穏やかな方法で教えることができるのなら神もそうします。それがこのような方法をとるということは、それだけ人の罪というものが深刻であるということです。

主にだけ仕えますと言ったその舌の根も乾かぬうちに、バアルの神々に走ってしまうようなイスラエルでした。では神はそのようなイスラエルを見放したのでしょうか。いいえ、見放しません。2節に、神は戦いを知らないイスラエルの次の世代に戦いを教えようとした、と書かれています。それは、武器を手にとって戦う、ただそのような戦いの仕方だけを教えようというのでしょうか。

#### 2) 主に叫ぶ

イスラエルがカナンの地に入るにあたって二つの問題に直面していたということを、最初に述べました。カナン人との間に起きていく紛争、それが一つ目の問題でした。二つ目はバアルが誘惑してくる、その問題でした。主の恵みを経験していない若い世代はバアルと戦うことさえ知らず、いとも簡単に誘惑されてしまいます。でも、主は彼らに戦いを教えるといわれました。いったいどのようにして教えたのでしょうか。9節前半です。「イスラエルの子らが主に叫び求めたとき、主はイスラエルの子らのために一人の救助者を起こし(た。)」

普段はバアルの神々を拝んでいたのに、クシャン・リシュアタイムの奴隷となったとき、彼らはなぜか主を思い出して主に助けを叫び求めます。その叫び声を聞かれた主は、オテニエルを与える。そのオテニエルも突然ここで出てきたのではない。すでに1章13節で、荒野を旅してきた世代の信仰者の代表と言えるカレブの親戚としてオテニエルが備えられていました。民たちが逆らって苦しい目にあう前から主が準備しておられました。

生きるか死ぬか、そんな瀬戸際に立たされたときにこそ、普段は隠れている奥底に隠れたものが露わにされます。そのときを主は待っているのです。

例えバアルを拝んでいたとしても、最も苦しくなったときに主に叫びなさい。主に救いを求めなさい。それこそが罪との戦いにおいてあなたが学ぶことの最も大切なことである。そうしたら主はどうされるのか。主のみからだは十字架において裂かれ、血を流し、神の子である方がいのちをお捨てになり、三日目によみがえられたことによって、この方は罪に勝たれたのだから、この方に叫びなさい。

私はひどい人間だから主は助けてくださらないと思うのでしょうか。いいえ。神の命令に背き続けたイスラエルの子らでさえ、彼らが叫んだとき主は助けてくださったのです。私たちは安心してこの方に助けを求めることができます。